諸家評定卷十一 智行下之下

和書門
類
二七二五五
號
一〇七
函
八
架
二〇
冊

内閣文庫
和書
類 二七二五五
號 二〇
冊 一五三
函 九
架

内閣文庫
番號 和 27255
冊數 20 (11)
函號 153 256

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十二年購求
大瀧文庫

拾家評定巻第十一目録

一条 宮とたるもの
二条 治世とたるもの
三条 家とたるもの
四条 数合多門乃分れるもの
五条 数乃歯とりけたるもの
六条 城主他所仕そなるもの
七条 弟対白丸を仕そなるもの
八条 表裏弟対と仕そなるもの
九条 数の福治とかりたるもの

十一ハ、戦の時とのゝ〳〵そなるまゝ
十二ハ、忠臣武略を仕そなるまゝ
十三ハ、強き者の将い様とおもひこゝろ
十三ハ、勇ましいあやまりこと働なとそ
十四ハ、物の善悪い時の勝負まよりゝたとそ
十五ハ、自分ハ悪い将人をもりけ
十六ハ、軍ようこりの思案あるもの
十七ハ、数ハよろゝ仕物あるもの
十八ハ、事ハよすてだくれまゝ
十九ハ、強い時合ハ、ゝ

諸家評定巻第十一　智計之巻下之二

一ハ、言をたゝかひ
ハ、ハ、空文百姓乃大ハ、数城へ、ゝけ行ハ、ハ、
ハ、ハ、百姓ゝて、ゝ大
言ゝ、ゝ働ありがゝ
軍なゝ、ゝ強ハ、ゝの人数ハ関東乃十里ゝ
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

御ちにはよ臣乃多下ゆはぬ百一番員ゆ与て
先を仕り。二番員ようら立て。よの前
よ与て先を仕り世の村り出立て中間のこと人
い怒りし。敵城のまへとつ。実ハ乃入里あま
つきの西と。もこにもうて。そいそぎ敵へいまこの
前ゆおよ。敵城乃ものにとりせ。劇敵をあげ
行ふ世敵あまは大番を相てうや去ていあ
じとて。西こ居城よりへふもんあり。或いあの名を
ぬぎ。る乃鞭をれりて。ら別ちふかやまば
行のはもつたまるべし。わりてこりざそら汁な
て一戦をあく居城してらわりへ動くこ。将

能敵と猪乃則い味方の猪年力と為さば也
古人をいり。猪よ入百猪わまは猪ゆて貴わぐこたるふ敵
城をうづに百猪わまもも乃人敵ゆて。ゆやと
攻ぐくとり行ふます。は年年いあうさと中せた敵ゆ
いまうもあは働。武乃動ちくこりべ。又
城中の仮い斤河乃ゆ別ゆ日乃つをあをと
ゆふくこ古人乃いへふがおこ。三年里乃うらふある
敵ゆは無矢ちをにぎらばと乃人をとくこるに
雷ありこをて敵へしをざらんとい大こなる
あるくへもべしとい乃

右安神

二郎淵とたゝかひしまゝ
城責よりあ勢をつゝ
淵へ入るの見れよりこの淵
引橋を負て城中へ人数引入
ゝ家を大勢ありとゝ
けの御ゝに入せ
城の見るを
強ましたらざる人数を
このんで敵城をづ
城中へは淵をを
いまのうさ場のひ

兵一人も御ふかうこゝろくんやとく去のび
げうたゝくの御のをぞ
刀の下刃よりなをば
わゝさまのようけ
城中の兵いわりさ
どして図をうちをす
い宝の内をさつ
かさ切て火の中に
うつく我され中と
をて三方強よわまを
ちの大ねの場ありと

右之評

この人は気をたゝかまゝ

さるゝを陳乃事如しよ敵味方にくんわひた

らけそろ戦ゆりそろ味方乃大ねゝの中別

りら伝わい今晩いをゝ大方ゝ

る。雑兵ゝよりそ酒とのますべ。を粕米

大ねゝるのはあてびるべ。かやゝ乃を気

をとて。おゝらゝ入まゝべ。かをちり

とふゝべ。一入よりけてのべくと。かゝらくへを

ゝを行ゝ也ゝよ軍中ゝを用ゝをゝりくゝ

しゝば。何をゝや乃ゝ乃ら別ゝよ也勢ゝてめゝ

ゝをふをゝよ。ゝ大ねゝ乃ら作ゝ人を天乃河

後ゝゝゝは四殿ゝくゝ。ゝ働ゝりがゝゝ

ゝのゝゝ。ゝゝ教ゝゝよ。ゝ乃ゝ乃ゝ

いゝゝ合ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右之評

家敎合ゝ

さ分国より敵しせ来るの方ゑんてうば大わ毛原
とわ川免。坪宣しして曰。しせてうの大わ者共云のと
とわごとを中及。又い家て戦場のようりとうかゆ
を抱じ生みて生を色のさ他法うと思て有り
さまは拵みして勢わう敵よいひさ先てさかは
色とんむうひ。生みして生を色なさ敵りいて
なうを色とすうを中ようりうて。ぞうて。
り今度の戦とうづ
し。敵将と身の生をかうようべて。し出法べ
とと思てべうし。そ生法と者ふ敵勢のぱう
を乃中はとうう。つさりひ勇て長法へきあり

先年は方の方いて寸ふ勝利と思ふ也。他ぶんちんい
軍の勢ありとの国思案ようく七百の人数と
二ようけ。一はい長城ち上道七日を前。一は
い先勢を一宝ひうり川さり。伊と諸とゆを。
なうを。思ひくを世を者ふ。敵と後長ゆ。世ていを
と考べして。ふ百騎の人数とこをけ。先は
五百騎。国勢乃陳ようを。ち中道ちあうに。一
和法とうして。結勢乃者外とやとめんてうを和
ま。国勢ひくの方くをみれば。さ和さうをを
仕ちわうを。ようを中ようを法のつを。ひ思ひうさ
ふ和対ふを。拵の奥と拵。ち西と拵。上をちて

こゝろざし深けれハたとへ捨ても勝の手をとるゝと
がむしやらにちからをまかせて我先にと打かゝれバ五目
勝のうちにも三目ばかり追討にせられて囲勢をはや
うしなひ勝ばかり討捕ば陣をうしなひて引きたくぞ
首尾よろしく後国勢にハ腹病神がつきてとや
かれんがくやかれんとやゝがてばかりの思案大きに
又囲勢ハ気よわくなげきをなし始めお決めるまよ
ましき里がしや漂けり続かにおろく後国の大将に
の大将へ兎角をなし終にも文ならぬと度の戦数
と緒家が右よ先ハ北軍勢と面勢うちよりて勢
かまつりへいとも三度あまり追立されけり無念

いかぎりなく存じ入大数ハ手ちかく先乃せりあひよ
語らそられ緒家ハ様辛ふ通をでいきかひとなし鳴音
の人数ハ気をうしなひかよわく気合へさき極を
なくゆるり様がつくさぞるおけるとおもされば同役
たちけ給ふなばこちからとはなちまとをとげ生じ世の流
悉みすまべきもなりとら作者にかくく又なの勝ば
かりの大将よせ手の方よくうつまゆき候り囲の大
将申けく曰今度ハ手ぞなじ先のきり合よいさぎよく
の勝利ゆるま備よ天の尓きるる不戌乃宮が宮なり
となる近いき上数ねハいづくも年来もかひ志
かも一倍よとくまそ人数おかくねながらかな勢とた

のきそろうし猶常にゆま。是又ことづつが威勢わ
ふ西あり。絵うに勝ともとごさんとするは負とね
よ似すりと古人乃いましめさ。されど何ぞ夜る
とわし千流づり此人数あく。ころ其の中にも勝
あるべきこと守ゆる也。其勝まぢらく事あとは門
とりんとをば事志ゆしてわやまりるべしことを
かゆと座ら食り見ぐるしうくきやうもも思ふ也
そぐしと青乃ううふ門ども。勇にて仕り。右の勝
とうしかうづう指ゆもそ。ぢ秋詠文西風を本し
ここよ海ぞんが。つま尖ぞくとば焼すそ。志のぶや
うにぞ門こ乃ん能ふ。能承すりが勢乃大ねをせつき

負るこの大将よたいめんおつく娼婦の指子をや給
ひ。負方の大ねよは矢見んとそ仕給ひけり。ち程は
云軍乃吉凶は務よ大なる負わきばなく
しき勝とありまたまきおりと相見ゆるこまげ
りしいまごこをにぃざろいおよ敵にこ見えそろます
ぞるおの威しおしあへ給自ぃさいの働あつく
二度とそれと知給ふよ。おつくは末代の恥辱うる千
との義よふつく。大将とものふうらつまこそく門知わふ
也。おの人が勢乃大ねのおくいをかんとして云。が勢の大
ねやるのここわうにようく敵乃門ぬ。るまは
は勇の威光とたわりめ。又は勝とらるもして門ぬ

ます。敵ハ乃智勇あるうさとれば先ずそろうよろく。義して軍陣ハ
をてう威をつけをてい國ハと都ろ乃人ハ行する
由將行陣すう則ハたゝかひと義經ハ乃ゝ
もうゆへまもうを

古今評

又品敵の備をうもけたるうます
さう國へ京方ハ敵をを来ふの陣ハ
ゝ國乃城ハ二里わまるを来ふわこう。浦雑
の城ハ。ゆうにうく國乃人ハ山浦ハ
乃人敵を亡敵を國ハ行ハ
にをり也又ハ乃金紙ハ伝。技ハ無を亡ます
ぐ事ハ用ひうさを義うゞ。陣ハたゝ
ハ乃ゝをする事ハ敵ハそうゞ久れ。戦
則ハ後ハ乃ゝ進すゞうます乃事
ハ行ハ乃ゝまけをする事ハ多ハ
又ハ乃ゝを来うんとする河ハ雑兵ハたち。陸の
と亡。乃指揮をまう國伝すうまかうゞさを
今度の敵ハ乃ゝまうにうくやうんゞく
程浦ハおりさやうハ及ハ。されゞ敵國を
うけざう河ハ氣をしあ。陣ハをうゞ。そゞ
浦ハをハ乃ゝうを程ますてあ。陸ゞの云ハ

ゑべくしに逆敵将乃たんてゑ我生乃たるべく
ゑらんと出浦迫ゑ又田のびけしてゑむさいよ越さんとを
ふあべくば敵勢とまたらゑ乃人てゑ乃ゑ乃べし。敵勢
ハ離れ乃つれくいひゑさちをあくるゑ乃くいひ
ゑにゑ乃働さゑるべくしに浦方十ゑの働さゑ
あくゑ員ゑるゑ乃ハゑまじきさこのゑつゑまにゑ
て出乃浦迫ゑるゑまたびりゑおゑり人数を
乃でせゑすゑ敵を待ゑよけゑ。せゑのたゑるい加勢の
様をばゆゑみまくゑど。浦迫ゑ陽乃ゑ出くゑ。国
勢乃ゑゑ乃ゑりくゑゑ。ゑゑ浦迫と打越さん
ゑゑ。ゑるのつゑまいくゑびゑ浦と乃ゑ軍ゑと一ゑ

をゑてゑをびゑ浦迫乃ゑをひくゑゑ越さんとゑ
ゑ。国勢こゑれとゑんてゑゑれいゑゑと待ゑけゑ。せゑ
乃人敵ゑ七拾騎ゑり越ゑゑゑ乃ゑ国勢ゑ百ゑ拾さ
と先ゑさけゑてゑゑ乃ゑ。地国勢いゑれゑ乃ゑ
乃ゑさゑりんゑとゑれゑ。ゑ浦迫ゑりてゑゑ又
ゑゑ乃ゑゑ乃ゑ軍勢ゑゑ浦迫乃地ゑ越ゑゑ乃べ
かゑべきやゑゑゑ。ゑくゑれゑて国勢ゑいゑさゑ乃
ゑて対ゑくゑ。せゑの乃ゑ勢乃ゑゑ先ゑ乃離ゑ乃
ゑゑんゑゑ。ゑい郭ゑりゑゑ。浦離ゑ地ゑゑゑん
ゑゑゑゑゑゑ。ゑゑゑゑゑ。ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
すゑゑゑゑ腹ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

ことわざなりぬ

右の評

六条城主悩病付る事

此家城攻の城中に乗さつとせしてハよせ手大勢
討死しけれバ少しにほとをなりよせ手もそれまでと
ひくはじと弱をなく又かりがらも少しすら案ありて
かしかく家来よ城の大ねまりてのかたよりびかへ給
ふなれく城中をおさめりこなりく能よ知りらん
城中ハ思ひよらバ難城をひきしもハおさへぬる
くとおりなるバよせてなさとしりハ城
主乃すらひとつくのおおりとさこゆりぞとそ

とや其ともに其どもろへびへびゆう此とおりめらしひま
ひ来しなく昼も事く評乱戦と且れなすらしそ
うとてけ主将しを小勢して月星うそびしき
来乃まゆ此城主吉臣を右ま猿してゆく
自分役ハ更よ年病よわし得劔をたつちむべき鎮也
徳うによりく去のびとつらしよせて乃ぬこ様をとう
うびり我けるぬ自分志案乃ごとく城主の役あり
とよろこび此事どをとぞもし酒よりをとらしてハ
にてたびの祝りせゆらかり志ても主有ハ小勢して
尋る所かしそれバ其色此村よ大陣屋く構構
敵を追まこり給ハりしとなりしかバ此城を其鎮せ

かりくしは結ひて、ちゝ物百文程ゆのびやうに撥
とおもふ。百わまりひりへそろ。数陳よ和対しておや
りこよ出をうけ。をめさきらんでかけまつる。ちゝ
なりよせをを大宵乃百文酒宴よ出て。おはを
きらび外居をろまりあるとは。一あり申ニよ小三
人知つき。我ハ強あきらよ出をたゆんとしてうる
へはてぐそ。けぐ子をあるうる。ちゝ御働んとする
ものを一人りかし。あよ城乃申居ハ思ひ乃まくまは
勝利一ばよあり

右五評

十京和村白出をを仕ちゝ

ちゝ三百物ゞりの大ねを続ゞり乃大ねし我ばかを
不歌味方の中間よ小川ありぬ物乃大ねは山度を
ハ色まて知おばやしいの。数大物あ出ハ和りけ
ばかまりの。大物乃方よハ小物をあかちりさ
のこに我りんををちりけ。ちりに小物乃大ねを寫
ぬををはりて歌乃格よ又ハ川乃流水をうゞひさ
まりよ。寫ぬこれを見ちゝて立ゆりぬ中のちと
ぞゞわぐふ。中一よ歌方よハ下れちよ人数をたの
こにおて見て。そちりぬいりんをあれハかゞつをを撥て
役人ものぬ。月仏する神ちをく。ぬをゞ乃大物よハ
歌の知りつをたをばとそ。ばゞくのまりあれんを

上中間より八ところ〜あまた川をわりぬ。しかるに
中ゑびす〜ぞ。されど敵わるしとて世わりしは
乃ちて。彦山川を。こゑ知出る神八幡しかぐ〜こさ
んくゝせざりそらぬ。又ぶ〜さのこと知会てし
多たる川敵ゐ〜ねぬづめ。ふら成とて。敵ひこ
ちくゝまくこゝふもまゑゑ〜ぶたこの風中ありこと
よろにちく。中野れたねそもこそ。奇乃義命を
そて。味方乃勢中はどて。下たに白ごとり弦ちを
敵乃和討よゝ敵ゐりたぬ。白おゑ乃ちあとばうつべりを
とおゐを。敵河ゐり和ちて四ゝ格ゝ結ゐゝ
右云評

八月廿日敵和討を仕ゐる事
さる戦ゝ敵味方たゝ組ねて軍能仕ゐ
中ゐゐ。たゞひゝ。たゞひゝ。ちゝ合て二日ゝ一度ゝ
一度乃こゝり合ゞりゝて。たゞに手ゞりのて
さゐ。ま大。ゝ。勝負ゐゐ。ゐゐ味方ゐ
竊道をたゞり。敵乃格子をゞゞり勢ゐ
敵陣ゝゝ用心ゞゞ。も仕り。ゐ和ゐ和ゝ
ゐ〜ぬ。ゝ敵ゝ乃ゞ。ゝ作ゝ。ゝ。ゝ
なりとゐ乃ゞゞ。ゝ。ゝ。ゝ
敵味方の中ゐゐの事ゞ
ゐゐ。ゐ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

金子の数をまんべんなくとせんどくあをそこけぬ味方
ハかくてのかくこのまこへ一りきとんわふ神ハて
ハとんとをかけるをよ。数これとすくらべつけハ
とるにたりく味方ハ名ハひかまく数とハ付て若ら
仕ら者共ハ味ハ乃数ハ入ら猶本乃人数七
伏ら付入ら数とてくこたくぬこにもふでぞた
くひけぬ付入ら者ハ十五一生乃ものとし形
骨乃働とあり。あり名ハ者ハ味ハのをられお
ハの数ハてくこまを後てて一人とハ為ら
ハの数ハてくこまを後てて一人とハ為ら

古毋神

九点数の福徳とかりそらまし

ら知合に数味方功者ハ大ねあまこハたりひよ用
ハらく指図とハたらまとあ。指ら味方乃形
ら者ハ分とハ若対ハ入へきもりハ。たセ若をひ
めさくれハ。ハやらやそらんさりけぬ後ら
ら者ハ俄ハ形ら者ハ。にまてあ。ハ指ハ於対ら色
数ら者ら則ハからぬ。ハ指ハ入ものかまこハ百
五十後の者共と二ら人ハ指ハ者ハ者ハ
者ら付て本寄乃番と十後とおらまこ。ハ後乃
若ハ七十後乃数とも。ハ百後ハ指ハ者ハ数乃数後ハ
若対ハて。雑ハ者共ハ数百わまらら捕味方ハ
ハ指ハ後対ハ者ハ。ハ人の者ハ味ハ数乃福徳と

なりとぞ。一戦このところ大役なり。まづおのおのに云
七郎ようちの用ことを仕つかまつりけるハことごとく
敵をおどろかすべきため也。敵これにおどろき一入り
用心して。乱をふせぐべきハ、それ其所にて又は備あつさ
分義ハ敵をたゆむる所也。これハ敵にありての
気を用ひりつかゝる也。又は夜討に入る毎ことに大
将の病気ありし時ハ夜ふかく夜討ハ入る事なと
仕をゆるして油断して常にひがごとにてちかやうふ
ならし。又を討捕る也。是おりしれ仕るハ戦陣の和
に敵の志のびのまじはらしで恩して下照をそうらん
べき事役也。ましに福岳するをとるかさるれで。

大役を仰つかはる時ハ、必ず忍びまけをとるべし。若陣ど
きをはからひ味方ハ物見ん福岳乃眼力をたのむべきを
又とるべし。ハ軍の秘伝なるとうけたまはる

右評

十一番戦乃時とのべするの事

さる戦に味方の先手、猛なる旗手すゝみ。敵ますますおしかゝり
おしよせたまふた。味方敗北しけるに、にとりて先手ハ
失合をそだてかけて軍乱おちては福来といふを
たり。敵又是を討留とむるに、又重ね福来とて又あまさで
討かゝせけり。是何事ぞや。かうかうや、ハ矢合のしれ
一番して討合ハ思ひのほかに大事までいろいろ家

い戦乃時とのべ。はゝ勢と結べき方便なべ。海の
に敵を仗しいたゞけて。滝夫といふけらまてハか
ぶらやといふことものありしいちぐいよ。ものの
で乃夫人とゝろうありしまゝ共也。されハ対ふりは
勢をつゝそ。味方勢ハひ海くあつく。終よ勝利
とはなりけり。戦よ法とゝそゝとの仰と敵のまゝぐ
ふ和成ゝ。良ねいゝとちあゝとゝけとゝそいひ
ゐたまいは味方乃はゝ勢をけぐゝ。思ものゝと宮ぐ
ふ先よ。敵を多ふよおいそ。敵よ十ゝ利ありり
と也物古物ゝ。ありぐゝ人の云味方の仰勢つぐう
ゝまゝ。敵はゝゝぐはよゝぐゝ。いゝんゝよ

まゝ。大勢ゝりゝゝゝたゝ敵小勢よ見ゆゝとあゝや
ぶゝそゝゝは。尤也。他夫人今よ滝夫又為まゝいゝ
とゝゝくふちんせゝゝまゝ。是とゝゝありぐ味方ゝゝ
ちふゝゝゝと敵一ゝいゝそ。ゝりけ。見乃ゝりわひ
とせゝゝゝまゝ。ゝ乃ハ敵乃軍とゝゝぐゝ有ありり
とゝすべゝゝとゝゝり

右之評

十一品忠信武略と仕ゝ

ゝゝゝ城と義ゝ。ゝ勢ゝゝゝゝ。三十騎ゝて。ぐゝ
里に為ひ居ゝ。也。御ゝに。忠信ゝ。ゝゝ。ゝゝ
ハ十九一生乃ゝ勇と。ゝ行ぐて。日と。逆ゝゝ

まで義乃無日を待ごとし。御主たる武士の
名を惜みて。一命をもわすれ。死をやすくを
んもの。況たの恥辱たりとこれいこと十世
一ぞの智男と思ひ。絶と仏ん法ともあるべ
き天よりけの指利をおもはらず。死に義乃たゆみやうん
じ。忠臣乃名と末代よのこころんもの。武士たるものの
大業これなるべしたるまゝ。ふかのべしの又事不
相則。義乃心堅つきて。自天罰乃わるべ和
うと思ひ。切腹しべし。自ら山わりて。金剛
寺に入。心眼法つもりて海をあらてかんぐん
と。たゆまずくまりまいく。我身うく。ふ仕者とあり。

のうかふ義天数いうちえ。二三千
騎ようちかこれうりぬ。今と二仏ゆく。先生をうん
ぶでうちんと思ひ。人てい。一騎遠ゆの義士ありしあ
のりを思ふ中。一入よりづくるを思のこと
に。彼とけつゆかまぶ。斤何をとふまれをまいぬ。
よ強ちく。勇よ称ゆこと。わたりるとふ
と。人大武男いあやうくして。ゆ。しく強ていまま
高くありぬ。上はとゆかくをゆ。伊をして強
郷ふろく。臣下うれげよおんてわるまとそ
墨家と。ま。ま拾とう人て。敵后乃うとゆ。わと
ういと度義城乃后下れまに。伊ぐしと云ん

ありしかりをを若かりてをぢうゝ是とあるまま
別乃子細をもちびく眉方の居しりを浪人の是
出べき仮をして来りたるまわりまと我乃ゐること
ゆるしまちの貴よ彩りとぐ主君と対なり敬
ゐ乃右仮くなすとべし。是遊仮よ出たりとの人々
呼よ浪ひ持ハ浪つまれいてて人い我ドとるもぐて
きの君居ゐ所ら家よおいて眉方乃大変
ゐたの眉を持ゑして。乃ゑよへらんこの仮によ
りて。ぐそこに私を指越ら来地さまでゐ持よ
浪とうへて来地とぐドけ。敬居ゆゑく大ゐよ呼
ぐたの入乃ををづけ。りゐ右ゐらることけゐべきを

のゐり。ゐをを敬ゐ文ゐ乃前と持ゑして。浪人の
ゐたこゐ。ゐへとぐドゐ地へ乃をて云是右の一天
ゐまゐら仮よ来り。是ゐ地ゐ地ゐまゐ乃ゐりと
ドふゐらく居起持を来地ゐて。敬居ゐ
命とたをけ。貴ハを恵ふらべをゐらべば
入乃是をゐて。今ハ仮とゐつむべ。我をハ眉方
乃居ゐりと若ゐつ。自と代乃をを対べをゐ
写ゐれをゐらをゐ。ゐ神をゐ仮ハ花角
とを家ゐまゐべ。乃是色ゐ乃ゐをハ家ゐ
いくをいひゐべ。孫ゐつくゐ大ゐ乃ゐ乃ゐと
彼ゐ安ゐゐゐ地是ゐ乃ゐをゐ是ゐをゐ

仕り候べきためにくゝ迫めつゝ
申候。一度申候とは仕候ハ
つくめ共ありとぞ申けり。後にはくゝ大わろ
ひんをあらとべくさとて忠男心の秘めはおりて枝
入りをよこうろ和をまぐぬぎさうへ仕りを。浦かと金銀
ぼくくれてうろ枝葉居いとやわざの浦ちあり。かも
ての思ひへ浦さまを家申候。大勢の者共浦乃ど
かさじと大和とも様しに居ちくへ大ぞ。ち長
居乃ものとば。いかぶはまの乃ぬ
和をとうどひ知。敵わの前わ乃ち和て功者の武男と
出るうぞ見ものてもかちせしやくて大勢わ

をちわひ浦くよくまてて彼よけ。さ義ふうと家
方の大和ないにおちりうろ軍者大日にわ月ま
ま。二度浦とさしわけくかくかちとばけ浦ふ乃ま
わろ人とれを浦して云員方の居下乃武男ふて
わやうさまくいわざるそくとの人。そてもナ和言
乃ま後とあうんといひ。ちとれ浦ぐに対とされ
うち時乃浦わやうぐに対ていぬ大利ま和うぐ
し。又浦よのをられうを和居の義分一敵居と和
ざうまま和ちありぬ。ぬくくれど和武者ふて後
働く敵とば。絵巻ようてぬと見ちうま
古へうりの武者あり。浦て敵乃居下たらん金を

ちゝぶの小平太。晴家清家とゝびて。ふたり。海こゝの
海人おもてばかりそのちゝくへ石ゐとまたさなる
ふえ〳〵いつべくさせ。又敵将とゝうん殿のおもわる紀
清と手おひたいりんとあるせおりんと思ふて。
手海人乃たたのひさつりあん海ちと重てかゝめこ
ぎ〳〵にりこあひくさまありさあくいう海でそ
と重てたいりんるべくさまを。ぐにうこれ恵
陸て河乃仕合より一日いはゆ猪刺といへ。
敵乃様なのきられぬやうびあんまゝりありと
ゝり

右出羽

十二郎 鎧ある将い様と走ゝとゝいるの
うる国よ者ねゝいるたねとの屋敷。さ日一里ゝる
海ゝて〳〵ねりまた。鎧るあるよ敵選人ありて者
ねとうあひきるにちゝ。居下りの大ねとす先
て云。選人見へゝせまらゝぶる先よ。一まゝりの様とひ
らゝさ海へり。鎧手を国乃大ねとは和書ゝゝ海
しませば。鎧ねをひゝへよりの和こ。選海は様代の
りまゝりりりのまゝよあるを。ゝとゝぞやたりの大ねを
ゝく日。毛程乃ゝゝとゝあんゝゝの選人のゝぞる
いりをとゝゝぶるまあるゝべ。金ゝりゝて乃鎧敵
ゝをおうんるゝ。城ゝて敵乃一戦めゝま

くるべしとぞ。ものおもひたるあるべし。度々のれ
りべしとのたまはせしかども。まことかんうんとおもひ
とのくるまねのまねしてこれをとりあつめ
よせ給うらんをこそ。はなはだしくもけうあるべし。
たねのはまにまかりあるべし。たとへば数
ををもうらうらんとやおもひたまへしもさやう
のかずまでいつけどんなるべし。結構にはかりつけ
とまづ意をあらべきまはの数をうつして人
数をはいつるべきはいかにはかりもどりに道人の様
伝のはかりてわんとそ。智様あるべきはたれ
いつべきなり。金平に数奇あるべし。対面はかりて

らんをいかけりあるたねをもとして夫婦つきは
をはかりはかりとしてをべきれば
ざけるべきはいまさまねのたねのはまにまかり
のまあ命のゞまをとりてたとへばうるか
どいそれんまはれしきとの義なるべし。き
義は数ともうべし。又数は単人ありいたに
まだ様のはかりまわるべし。又数は単人ありいたに
を智略をあらべきはるべきあるにはかりの弱
ことのまひく長歌とも都合はまにまか
様はかりあるべしとこれを武わの様
ものはの相とは古人のいまりはえるとこりり

古今評

十三流弓矢あやうき働あり と云り

ひろくの三義員乃軍書武家要集よりかゝ

ふも云ねいあやうきまとあるべしとあるべし國の

わきの軍法兵業紀と云書にも西征あり

利わるしあやうきを前者年かまた戦と云

ど弓矢よりかきまとてあるべしに云方

則十云一ゑの様とあり此と云ねいふあり

ゑざれど十五一生の間あるべいあやうきわざ

くしんと云ねこと則べし徳ゑに若だん乃備よ

て平家まもり義女とのをろ紅の神よ扇と云

て源氏の陣ちくこざおと義経ゑられと乃多ひ

敵乃様くいれば弟ゑ一よわ乃扇ゑ

とゑるまいりとまりいれば弟ゑ一よわ乃扇ゑ

を一ゑ乃ちを敵紅ちゑ神をとゑ弟ゑ河いゑ也

又ゑ扇を神ゑるゑてゑ乃徳ゑあり乃ちゑや又矢

ゑざゑいとゑ也ゑ扇ゑれいゑゑ乃人と河

合にゑく月面乃ちゑゑまれゑとみゑゑ

様文風を以後を去川ゑゑざゑ様ゑまゑゑ

ちゑゑ牡月面ゑ乃ちゑ定めゑゑゑゑ人ゑ

をいゑゑゑく神ゑ弟ゑ乃ちゑ矢風よゑゑゑ

ば神ゑゑゑゑゑゑ乃ん河源氏ゑとゑり神ゑ

祢ぎあれた。矢わざいはようくばみで来代までの
わざをうとめべし。世ろのとりたるよわやうさまま
わざをばめべきあるべしわやうさまふわうさまを知
とうにいこたりうくはやくあべくくの数のれ
ぎーかぎーてぐちとりんとあやうさやうか
またうちとろべきまの仮とうく田業わうあ地ぺさ
田業をあくしてやあ田よ以利うくくをて当時の
勝うちに目を付かむうまいあるうくめべしんわ
らんものいもとう弁はぺ古くの云勝とくたおうん
ぐりあさをばうとうきびとくうり様は者弁世
よやうんくうる義経云ぬまたぺ時乃わやまわいるき

とかくうりとくり

右兵衛

十四郎わの長兵いい時乃勝負ぬうくどとうり
ぬうくの同云。田ねいい決勝と古くのとうぬわり。御るに
者弁ぬくくよあのてぺわの長兵時の勝負ぬうう
どとわりめ。長云むうぬいい結決勝ぬ地ぺ云
兵ねうわくくくくたぺ弦よいい勝ぬまるぬうと
くくくたぺ弦よいい負ぬまるぺ又同ぬうくば軍いわり
まるべくくぺ。天よまるうくからんやぺ者云むう天やう
地よまるくくくぺぬるあくどんいい勝乃勝るくく
くくぺ。とくくいい流卒いい車勝乃どくぺねいい独のくく

独だちあるべきれば軍のめづらしきすがたをあらはだしうあるべきれば結構乃働まつてさうべきれば
八千兵はいりまぜやうにて一将はいりまぜでこしとおも
人をいそぎ又回たりべき時乃物頭ようべしとあり
若云ひ物をとり捨よハ一旦まうきみてしい大
を幼法乃ようきとんだ大ようなるきあり又最
将をたぎんよ一旦乃物色をてしいた行法きまつ
たくして面倒の物をとりそびとおてうりされば時の
物頭よりうべきて法うち時乃家よんを付て見
ゆべし

十六ヒ良ねあ将のをやりの事

うる乱功乃士の云ひ良ねとよびれ人の物語とも
及ひよ義よ法制うる時いつしこの事をあ中情くよ物
時ハ法句横畑よげよ刀てをあ中情くよ物
率ういきひ乃ひ乃ひ時ハ自法しこあ
きりひ乃制度ありり結率又とるる乱ろあれば
自いきりひとあり軍勢をたとるめべきれい
欲を長れ七ろよるべ又数将をりべ乃ハ時
ろやり国民よ心を付潜場乃制度とあり数とい
ハ丈を寵をろんでは法をあり地形よ乱を免べ
きべき地をば先をきこれかるべきをばこれ紙
かるあ也又我りてあり時ハきうりを紙りて勝とう

らうじん。張良をろわそひおこして。孫呉の兵をた
とけ、わもんをえらびもして。深き謀略を以
て。千の貢わる軍をも一所の陣よたゞかひてこれ
しりぞけまねくと見て。これよりまさしき智計を
あらはすなり。又敵ねいをとしの備あるにて。孫
呉にまさりたるは何ぞ。かくの陣をとめてまひうき
かひそあふもじ。しろくたてさかひとあしりそ覚
たくへハ。わが火のよ敵と浮るがゆゑに。敵よ撃よく
じられぬ。大きなるまなけをとらぬ事多くしてよを
しかくてなる所ハ。孫呉乃こころもちを知じ
て。うちとゝあけ。よゑをひきふして。将たる気を

とめらりし所なり。爰をたとへバ。人ハ宮殿なる人よ。浮薬を
あたゆるがおとし。病よ気を絶かりてあるましと和
まそあく死をとるや。兇いまさこそかなひまけあまりは
こげりう十分乃まけとあらぬなり。又きたぎんよ論ずる
とおりいはゆる。所ひてハ自然と調和するが病よ。それをとぐ
わしたがへ。敵とくさしうちあてごゝよ使ゆ主たる
を因あるよ莽し。國民を愛さんとしきびしくあ
法をさけしく守。制度ありてきゝ濫妨をせしめま
たあぶん。路ちりきが病よ賊寇よ目をつけ道ずべく
にあけてもて。拙形わもあらぬてにはわそれて
治めんとするなり。されども一旦ハ活ふ志あるもとに人

大志実は一味をなしたまいあり。これ国家を治
し。強とさんだんして。民といいつるの時は麁動あり
又国をおさめた。民をやしなせいたるとわ〳〵これ。麁
動とあり。則ち。強乃らるるまま。さうしゝ。治平
とあり。則ち。強乃ち勇なし。あるいわ強とつゝし
勇わい強時とそのゝ人をそこいり

右五件

十六品軍に二つの田業わるまま
さるわ乃田業城乃時とうせるの時しのゝ人家
ひとりとさくわく別わり。まず業城乃時い家客
と行業とすべし。家客しらい城塀柵りく

て或いさるとく或い浪雑乃地八乃義合業林か
らにとも地よ森してあをぞの苦と言わるひそ
お城とかまへ或い稲米のほへ数乃やをめ他
国への国法とあさくれわやうよとすべし。又敵をを
求らん方ゆはるゆとりまへ。ぞきて行べらを
さてんぞうに城とてたくりべ。これい
古への城と結わん方乃国法とあるべ
敵乃たしわかさがぞくにするとい業しとる敵
の人る働ぞさたしくのてだくわるとい客しとて
わりぞくゆひかべし。又をて乃時をもんとと
あり。もわざとさる則いもあんをあさひるを

ゝ弁。敵乃長吳と能乃人をしてぞせりふを草
まぐ。又城のそばをとせし時ぞのもとゝ
にをとゝつく先をかうぞをひろくして。い
さをひとをごとをべゝ。又平城よりの敵乃
ばをとをちゝくしたりをとりてせめんとわがぐれち
き別ぞ。長合をせきをめんにすれし
又一新ぞ。城をせむる時ぞ。敵方乃籠の通路他
圓乃ぬけをよをを付。もをしうべゝ。長城
の色ぞ付ハ一方をわけて敵乃氣をひきん敵
先をまゝ。ようを地形をとりをめく籠をとゝ
ひをとをい。弁の招をするぞのゝまゝ

十京敵將ぞのゝく籠ぞのまゝ
ゝ人宮て。大ぬ乃ぞ。ぐゝかををゝ。又ぞ
生にをりをゝ大ぬをゝ。ぞをゝ。ようぞ。若を
をぐゝ。大將をゝかゝ。をゝ大ぬ。生ゝ大將を
ぬをゝ大ぬゝ。名別ぞ。ゝ大ぬ。生ぬ大ぬ
敵ぞゝをゝ。ぞ。ゝ大ぬゝ。ぬ
ゝ大ぬ。敵ぞゝ。ぞ多ゝ敵
ぬぞゝ。ぞのゝくをぞ
ぬゝ。ぞをゝ。ぞ。ゝ
ゝ。軍をまゝ。ぞ。ぞ

うちたゝねといふなり又ちゝ
ぶにはちんとして壺をもつ
いふなり又たゝきたゝかい田業
て調物よりあつあつとして
たゝ前をうく調ものにうつ
利わり又壺者大ねは住方
義とて手のうしくちやう
仰手を人法よりうとい
ばおうちたゝねいはゞとう
ゆーまをたゝ法句ゝるう
乃んとうちたゝねとい

とたゝまにおいて同合ようたんよおいて
縁とうまゝまてこいたゝ縁りうまるとたらんない利
かうしんたんとしまとしたくの巻といりんぐう
りうとうとして石数をまぶらべうそうを数こう
思ひとなり石をうとんとして戦石の死する戦
ちうぐうぐくるうるべうゝ妹ようゝ軍い鑑乃たりてう
にをわうこたんをいりう又石かうたゝたゝねとまるう
たゝねを数ようたうこう河いめう若云たりうたゝたゝねなど
しうたゝたゝねとぐこにうとうとう智勇わう則ハかうたゝ
たゝねまるうたゝねを対うりたゝんたゝまたゝなどうのう
ちふわり

十八ぶ事ふすてだくの事

さる人宮て云戦場にて敵わるいよみにくさまわざ
をぬ又ひそうにてどくさまをぬ給ふ先ハ敵り
源憲ちるまの地とみしいら給ふ敵味方
よ痛迫乃ちあさとつ事わるざる地ぬ
味方乃仕ハ敵よりるまやるべ給ふ
そて敵の宮をうけて知ちんとする時ハ
敵と味方乃強弱よ事をざる時ハ用をこの
ちをるべ又色とうる時ハ敵よりもそ
様ぬるべ乃ぬ称ぐくいこれをもつ
べ乃ぬ云ハ敵乃宮をうべき為

ありこれでひそうにまをとるべ大きに利
とりてうり又敵乃痛迫ハ我陣よりと用心を
ぬ事ちりぬ給ふ味方よりもとあ
ぬ味方よりもとるまを敵と
ぬ敵よりもらんとうるまを
ぬと称ぐくいこれをもつ
うるあり給ふ事にしすると
うるあり又同て云こと
へぬたよ仕ぬ事ちしてちよりも称をして進
これをもてにすると地やるひおよわる
ぬの宮をたりて敵国へうく地をんと
ぬ陣度よりもせ又敵乃合をうをうんと
宮を取よりもうる味方の軍云乃ちをめを給

かりを行ふべし

十五品孫に対合ふこと

あるべの云。章句乃書下の二二よれわく。評ことなる
きぐるまはめ多ぐや。若云は二巻は孫男とて
ありこれは孫男はこれにもわざよりあるとも
べたは対合ふこと的利とかんべ人見とか先又者ある
き孫男かもたは対合ふ無ことんべ見
ぐ物ることんてこれ品業するに孫略はこれたることに
ふるべ〳〵べ対ふるべ〳〵べ。これで若色と呼をさ
ふるまこと。なほ乃ん物の義とそこりこあ。若にまり
をは人の孫男はたるこあ云めんがたるふるん

のこあり又問云こと云ことめ〳〵てうら全して章句
まはめ多。若云たるべで結密ふんこと云ことあ
くこれを密すること〳〵べたは志ちんと敬ふまる〳〵対ふ
章句又きは章色かきは大ねの密続とるまま
ぐこうこ志べこうにして。敬ふ初こ対ふ孫ふのを
ふるまはりこれとはんぐ〳〵行べ

帝国図書館蔵

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan